

楚辭と屈原

— ヒーローと作者との分離について —

岡村 繁

「離騷」をはじめとする楚辭文學の主要な作品の多くは、楚の悲劇的な愛國詩人屈原が、みずからの忠憤と懊惱とを格調高く詠みあげた不朽の名作といわれる。そしてこうした屈原に對する愛國詩人としての評價は、特に新中國において近來ますます強調され、今や不動のものとなりつつあるように見うけられる。だがしかし、屈原が楚辭の偉大な作家であつたというのは、果してほんとうなのであろうか。たしかにこの屈原觀は、はるかに遠い往古からの由緒ある傳承を踏まえた、ずっしりと重い權威ある見解には違いない。しかし私は、だからといって、その見解をすなおに受け入れるのは少なからぬ抵抗を感ずる。なぜならば、それら多くの楚辭作品を押しなべて屈原一人の作品と見るには、あまりにもあくどく、同じ調子で泣きごとが繰り返されすぎているように思われるからであり、また屈原がみずからの行動や心情を詠んだにしては、あまりにも自畫自贊が勝ちすぎているように讀みとれるからであり、さらには、古い時代において、しかも同じ作者の手になつたにしては、あまりにも各作品の詩形が多様でありすぎるように見うけられるからである。

のみならず、近年になつて、楚の國の版圖であつた湖南省の長沙・河南省の信陽、楚の最後の都となつた安徽省の壽縣などから大量に發掘された考古學上の成果によれば、戰國時代の楚の國は、いわゆる荆蠻の地であつたにもかかわらず、われわれの想像を絶するほどに華麗で豪華な高い生活文化を持つていたようである。そしてその高く華やかな文化の香りが文學の面に現われた例として、われわれは、當時楚の國に輩出した修辭家の彫琢された美しい言葉や文章のいくつかを、今も「楚策」や「史記」楚世家の中に見ることができ⁽¹⁾。こうした楚の國の绚烂たる文化環境から推察すれば、この國の、少なくとも知識人階層は、一般に相當洗煉された美的感覺ないし文學的技巧を身につけていたと考えてよく、従つて楚辭のような比較的高度な修辭技巧を必要とする文學作品でも、これを作り得る技倆をそなえた詩人は、一人二人といわず、おそらく幾人も彼ら知識人階層の中に用意されていたことであらう。もし私のこの推測がさほど不當なものでないとすれば、従來のごとく屈原一人を、しかも楚辭作品の多くに共通したヒーローである彼を、そのまま一律に共通の作者として決めてかかることには、便宜主義的とさえいえそ^うな、古代認識への甘さ・亂暴さを感じないわけにはいかない。

また、戦國末から漢初にかけて作られたとおぼしき比較的古い時代の楚辭作品の中で、正面から屈原をテーマに取り上げるか、あるいは彼を強く意識しながら詠んだと認められるものには、「離騷」・「九章」・「九辯」・「招魂」・「遠遊」・「漁父」・「惜誓」および賈誼の「弔屈原賦」・東方朔の「七諫」・王褒の「九懷」の諸作品があり、その總数は長短あわせて實に四十篇の多きにのぼる。ところで、屈原と同時か比較的彼に近い頃の作品がこれだけ多く残っているからは、もし屈原が後世喧傳されるほど偉大な楚辭文學の創始者であり、ほんとうに多くの名作を残していたのであれば、彼の作品すべてとはいわないまでも、せめてその最高の傑作「離騷」を作ったことぐらいは多少とも觸れていてよさそうなものである。にもかかわらず、いずれも言い合わせたように、専ら忠臣としての屈原の悲しい生涯や天地遊行を詠みつづけるばかりであつて、楚辭作家としての彼に一言でも言及した作品は、意外にも全く見當らない。屈原の事蹟やその心情を今に傳えるものとして、如上の作品群——少なくともその大部分は最古の資料に屬するであろうが、そうした作品すべてにわたつて例外なく認められるこの普遍的現象は、漢初以前の人々が持つていた屈原像が、單に忠臣としてのそれに止まつていたことを物語るかに見える。もしそうだとすれば、彼を偉大な愛國者・愛國詩人と見る兩漢以來の屈原觀は、明らかに漢初以前の屈原觀を大きく踏み越えたものであつて、この新舊ないし廣狹二つの屈原觀は、その移行過程において、なんらかの人爲的な増幅作用または包攝作用が加つたことを假定しないかぎり、無條件には結びつかない性質上の懸隔を持つてゐる。だのにそうした人爲的契機の介入を頭から認めないとすれば、この二つの屈原像の消長——忠臣としてだけの古い屈原像の方はいつの間にか立ち消え

になつて、忠臣・詩人の兩性格をそなえた屈原像、いわばより偉大な方の屈原像だけがひとり後世に罷り通つてゐる現象は、いったいどう理解したらよいのであろうか。

屈原を楚辭の偉大な作家と決めてかかることから生ずる、以上のようないくつかの不合理な點は、おそらく私だけでなく、多少とも楚辭を讀んだ人ならば誰もが氣づくはずである。にもかかわらず、こうした不合理な點をほとんど不問に附したまま、屈原を楚辭文學の創始者と認め、それを動かすべからざる前提として楚辭が讀まれ、考察されてきたには無理もない理由がある。というのは、最初にも少しく觸れたように、われわれが容易には動かし得ない權威に支えられた古來の傳承が嚴存しているからである。すなわち漢の司馬遷（前一四五—前八六）の「史記」屈原傳にいう

(1) 屈原、疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作「離騷」。

(2) 屈原之作「離騷」、蓋自怨生也。

(3) ……乃作「懷沙」之賦。其辭曰「陶陶孟夏兮、草木莽莽。……」

(4) 太史公曰、余讀「離騷」・「天問」・「招魂」・「哀郢」、悲其志。

また彼の「報任少卿書」にいう

(5) 蓋文王拘而演「周易」、仲尼厄而作「春秋」、屈原放逐、乃賦

「離騷」、左丘失明、厥有「國語」、孫子膺脚、兵法脩列、不韋遷蜀、世傳「呂覽」、韓非囚秦、「說難」・「孤憤」。(「史記」太史公自序もほぼ同じ。)

などに見られる司馬遷の發言、特にその屈原傳は、周知のように、以後久しく絶對的な權威をもつて後世の屈原觀を規制したのであつた。そしてこの司馬遷の見解を襲うものとして、「楚辭」十六卷をはじめ

て編纂した前漢末の劉向(前七七一前六)の「新序」節士篇における屈原の傳記、およびその「九歎」の

覽屈氏之離騷兮 心哀哀而拂鬱(惜賢)

歎離騷以揚意兮 猶未殫於九章(憂苦)

與離騷之徵文兮 冀靈修之壹悟(思古)

ついで後漢の班固(三二—九二)の「離騷贊序」の

「離騷」者、屈原之所作也。屈原初事懷王、甚見信任。同列上官大夫、妒害其寵、讒之王。王怒而疎屈原。屈原以忠信見疑、憂愁

幽思而作「離騷」。……至于襄王、復用讒言、逐屈原。在野又作

「九章」、賦以風諫、卒不見納。(楚辭王逸注「卷一」)

があり、そしてついに王逸(？—一四五?)の「楚辭章句」に至って、

「離騷」や「九章」だけでなく、その他もろもろの楚辭作品についても一々具體的に作者を指摘し、その多くを屈原の自作と見做した。かくて偉大な楚辭作家としての屈原の地位は改めて強力に保證され、その高い名聲を決定的にしたのであった。

ところで、右に並べた司馬遷以來の傳承を通覽すると、いずれも大筋としては同じ路線に沿うてはいるものの、部分的にはそれぞれの間に相當歴然とした變化があることに氣づく。すなわち、「史記」屈原傳では未だ「九章」という作品グループの總題は見えず、わずかにその一部の「懷沙」・「哀郢」を小分けの篇名で紹介するに止まっていたのに、劉向・班固・王逸になるとはじめてこの總名が現われ出し、しかもこれに含まれる九篇をすべて屈原の作品と見做すようになっていくことがその一つであり、また「史記」屈原傳では「漁父」を必ずしも屈原の作として取り扱ってはいなかったのに、王逸になるとはっきり彼の自作と決めてしまっていることがその二つである。このような

推移を見ると、後世の屈原觀をいち早く方向づけた司馬遷→王逸の間においてさえも、年代の経過につれて屈原の作品が漸次増大していく傾向にあったようであり、従つてこの時代の屈原像は、決して當初から固定したままであったのではなく、たえず偉大に偉大にと成長しつつあったらしいことが推察される。ということは、言いかえれば「史記」屈原傳をも含めた古來の傳承が、案外信頼のおけないものであるかも知れないことを暗示する。にもかかわらずこの屈原像は、後世の人々からほとんど疑われることなく、宗教的ともいえるほどの絶對性を維持してきたのであった。もつとも部分的には「遠遊」・「卜居」・「漁父」などいくばくかの作品のように、近來の研究が屈原の自作でないことを論證し了えたものもあるにはあるが、それはあくまでも古來の傳承に對して多少の修正を行なつたまでであつて、やはり屈原を楚辭文學の偉大な創始者と信ずる基本的な態度に變りはなかつた。そして従來の楚辭研究がこれほどまでに古來の傳承に執着し依存しなければならなかつたのは、詮じ詰めたところ、たつた一つの理由による。それは、よし古來の傳承にわれわれ後人の納得しかねる點が多々あるにせよ、とにかくその傳承は「古を去ること遠からざる」時代からのものであつたからである。

だとすれば、まず何よりもその傳承が由つて生まれ出た本源的見解——司馬遷の屈原觀について、それが果して信頼できるものであるかどうか、嚴密に點檢しなおしてみるのが直接的である。そして、もし彼の屈原觀さえもが意外にも夙に確實性を缺いたものであつたとわかつたならば、その瞬間において、傲岸な傳承の權威は脆くも音を立てて崩れ去るであらう。そうなつた時われわれは、あらためて、ほんとうに屈原は楚辭の偉大な作家であつたのか、それとも作家というのは

單なるこけおどしの假面にすぎなかつたのか、全く新しい出發點に立って検討しなねばならぬであろう。

二

司馬遷の屈原觀の信憑性について考察を加える前に、念のために、その前提として、私の屈原に對する基本的な姿勢を明確にしておかねばならない。私は、前節で述べたように、楚辭文學の偉大な作家として屈原を性格づけることにはあくまで懷疑的な立場をとりたいと思ふけれども、かといつて、かつて清末の廖平や民國の胡適が提起したように、屈原の存在そのままで否定してしまおうとするものでは決してない。屈原という楚の衰亡期に出現した悲劇的な一人の忠臣、後人から長く追慕されるにふさわしい情熱的な一人の愛國者は、詩人としての屬性を附加しないかぎり、おそらく確實に存在したのである。なぜならば、前漢のごく初期の詩人賈誼（前二〇一—前一六九）が、「側聞屈原兮、自沈汨羅」という詠み出しにはじまる「弔屈原賦」において、はつきりと屈原の名を出して彼の悲運を追懐し哀悼しているからであり、また賈誼とほぼ同時の人である會稽の莊忌もその「哀時命」において、同じく屈原の名を詠みこんで「子胥死而成義兮、屈原沈於汨羅。雖體解其不變兮、豈忠信之可化」というからである。さらには、おそらく楚國の公式記録かそれに類する有力な歴史資料かに直接據つたであろう「史記」楚世家に、わずか一箇所だけながら「屈原使從齊來、諫王曰、何不誅張儀。懷王悔、使人追儀、弗及」という屈原に關する明確な記事が入っているからである。

ところで、その屈原に對する司馬遷の認識程度はどれほど確かなものであつたらうか。これを推察する最良の資料——というよりもほと

んど唯一の資料は、もちろん「史記」屈原傳である。この屈原傳の編述に關して、かつてわが青木正兒博士は、鋭くも

「全體この傳は、時代の背景と離騷篇に關する評論と懷王の不明に對する非難とに多くの言葉を費して、屈原自身の事蹟を敘することは甚だ僅少で朦朧としている。察するところ漢代において屈原の事蹟はあまり知られていなかったらしく、それを史記の編者が彼に對する同情から、その傳記を成るべく輝かしいものに作り上げようとつとめたのではないかと思われる。」（「新譯楚辭」一八一—一九頁）

と指摘した。この指摘は、從來なぜか屈原研究の主流から締め出されてきたけれども、實は極めて示唆的であり、かつおそらくは問題の核心を突いているであろう。まことに、屈原傳に敍べられた「時代の背景」だけを取ってみても、當時の楚をめぐる國際情勢の敘述は、屈原という個人の事蹟に對する補助的な説明としては全く冗長をきわめ、この部分だけで優に全篇の四分の一を占めている。これはたしかに列傳の在り方を無視したアンバランスな文章構成といえる。しかもこの冗長な部分は特に屈原傳のために作られたのではなく、終始楚世家（懷王二年—頃襄王三年）の文章のほぼ忠實な複寫である。また、この部分の中でも特に懷王が武關の會に赴こうとした時の記事——楚世家（懷王三〇年）では「昭睢曰、王母行、而發兵自守耳。秦虎狼、不可信……」とあって、「昭睢」が王を諫めたことになっているのに、屈原傳ではこれを「屈原」に改めていることは、この前後がすべて楚世家からの借用文であるだけに、司馬遷が殊更屈原の事蹟を光彩あらしめようと意圖したで、ちあげとしか考えようがない。以上のように、この傳の「時代の背景」の部分だけでも、司馬遷がこの傳を編述する

のに相當な無理をしたらしい跡がいくつか數えあげられるが、これは、司馬遷が屈原の傳記資料の貧困をカバーしようとして、やむなくとつた窮餘の一策と見てよいであろう。司馬遷が用いた屈原の傳記資料の貧困さは、ただに上述の點から推察されるだけではない。さらに廣く屈原傳全體を通覽してみると、すでに指摘したように全篇の四分の一が楚世家からの借用文で占められているほか、この傳の終り三分の一にあたる長い文章も、周知のごとく楚辭の「漁父」と「懷沙」とを丸寫しただけである。この兩部分を合わすとすでに屈原傳全篇の六割近くが埋まってしまうことになるが、これを含めて全篇の約四分の三は、すべて特別珍しい屈原の傳記資料によつたものではなく、われわれの手持ちである「楚世家」・「易」・「漁父」・「懷沙」ぐらいがあれば、一應完全な編述ができるといつても過言ではない。のみならず、残り四分の一にあたる冒頭部分にしても、明らかに淮南王安（前一七九—前一二二）の「離騷傳」から寫し取つてきたとわかる文章が相當の紙幅を占めており、もしかするとこの「離騷傳」からの借用文は本來もつと多かつたかも知れないと疑われるふしさえある。このように、司馬遷が屈原傳の編述に用いた資料を洗い出していくと、それは意外にも僅少で底が浅く、かつ現在のわれわれの持ち合わせを大して超えてはいなかつたことがわかる。

屈原傳は、その據つた資料の量が僅少であつたばかりではない。その質もまた、どれだけピエアなものであり、従つてどれだけ信頼できるものであつたか、疑わしい。例えば、屈原傳が「離騷」を評論した部分に引用した前述の淮南王安の「離騷傳」は、司馬遷よりわずかに先んずる資料にすぎず、しかもそれが楚辭の熱烈な愛好者・保護者であつた武帝の勅命に應えて作られた書物であつてみれば、天子の意を

迎えるべく、意識的に「離騷」を權威づけようと企圖することだつて考えられないことではない。さらにはつきりした例をあげれば、屈原傳は「漁父」の文をほとんどまるまる屈原の事蹟として傳記の中に組み入れているが、この篇は、すでに疑う餘地のない定説となつていようように、後人が屈原と漁父を借りて儒・道の思想を對決させたフィクションの作品である。このようなあやふやな資料までも司馬遷がほんとうの傳記として信じこんでいたとすれば、かかる無定見な態度で編述された屈原傳は、いわば興味深い物語りではあつても、もはや最後まで信頼できる歴史ではない。またそうではなく、司馬遷が不確實な資料と知りながら敢えてこれを採用しなければならなかつたのであれば、彼はよほど屈原に關する傳記資料の缺乏に喘いでいたこととなる。いずれにせよ、屈原傳——少なくともその重要な傳記の一部が、質的に確實性を缺いた資料にまるまる凭りかかつて敘述されていることには變りがない。そして司馬遷のこのような曖昧な資料の用い方から推せば、屈原傳冒頭に見える、屈原が懷王から疎んぜられた契機についての相當具體的な記述——

懷王使屈原造爲憲令。屈平屬草藁未定。上官大夫見而欲奪之、屈平不與。因讒之曰「王使屈平爲令、衆莫不知、每一令出、平伐其功、以爲『非我莫能爲也』」。王怒而疏屈平。

も、たしかになにかの資料には據つたのであろうが、それが真相であるかどうかは保證のかぎりでない。というのは、「屈原を懷王から引き離すにはあまりにも兇戯に類する瑣事」（青木博士「新譯楚辭」二〇頁）であり、また屈原の不遇な生涯の開幕として、あまりにも彼の文才と密接に計算高く結びつきすぎているようであり、従つてまた話がドラマチックでありすぎるように見うけられるからである。このような状

態だとすると、屈原の事蹟に關して、たとい司馬遷がわれわれの知らない先行資料を多少持つていたとしても、その資料自體がすでに怪しい代物であつた可能性が大きい。

これを要するに、司馬遷のすぐれた才識にもかかわらず、「史記」屈原傳は、その據つた資料の質の低劣さから見ても、その量の僅少さから見ても、屈原の眞相を十分に見据えた信憑性の高い傳記とは到底認めることができそうにない。だとすれば、屈原を楚辭文學の偉大な作家と確信する古來の傳統の見解は、その出發點において、すでに早くも根據薄弱である。まして屈原から司馬遷にいたる戰國秦漢の頃は、周知のごとく、あらゆる文化現象が朦朧たる謎の霧につつまれた時代である。従つてこの間に、司馬遷さえも目の届かない楚辭文學の祕密が、他の多くの先秦古典の場合と同様に、ひそかに作られていた可能性だつて十分にある。比較的確實な記録に恵まれた漢の武帝以後の時代でさえ、例えば、明らかに後人の僞作である李陵・蘇武の往復書翰や唱和詩が、久しい間それぞれ當人の自作とばかり信じこまれていたことを考え合はすと、問題の多い戰國秦漢の際に、屈原といふ楚辭文學のヒーローがその作者にすりかえられてしまう現象が、絶対に起こらなかつたと誰が保證できるであらうか。ここであらためて、漢初以前の楚辭作品が、屈原を作家としてではなく單に忠臣としてだけ取り扱つていたことを想起すれば、なおさら從來の屈原觀に大きな疑惑と失望を感ぜざるを得ないであらう。

ではわれわれは、楚辭文學の成り立ちを考える場合、いったいその出發點を何に求めたらよいのであらう。私は、もはやこうとわかつた以上、信頼できる方法としては、傳承の一切を今こそ思いきり排除して、直接作品それ自體の検討から出發するしか手はないように思う。

そこで私は一つの試みとして、楚辭文學の顯著な表現上の特色である作品間の類似句を主な手掛りにして、なんとかこの問題を解きほぐしてみようと思う。特に類似句に目を着けたのは、その用例が相當に多く、考察の資料として十分任に堪え得ると認めたからであり、またそれは、各作品の相關關係を探るうえに最も役立つような表現様式と見込んだからである。

三

現存する楚辭作品の中で、最も——というのが言い過ぎであれば比較的、早い時期に作られたものとして「離騷」・「九歌」・「天問」・「九章」・「九辯」・「招魂」の諸作品を擧げるとは、おそらく異議がないであらう。そしてこれらの作品のうち、内容から推して、最も如實に屈原の不遇な境涯や沈痛な心情を詠んでいる作品として、「離騷」と「九章」、および多少甘く見込んで「九辯」の三つを選び出すことも、これもまた妥當なところであらう。もし屈原が、ほんとうに偉大な楚辭作家であり、みずからの忠誠や苦悶を作品として見事に結晶させたのであれば、その作品の少なくとも重要ないくつかは、必ずやこれら三つの作品——より嚴密に言えば、これら三つの作品グループの中にこそ含まれているはずである。なかならず「離騷」と「九章」とは、紛うかたなく眞正面から屈原をヒーローとした作品であり、かつどの篇も切々たる心情が漲る格調高い名作ぞろいであつて、いかにも屈原自身も切々たる心打つにふさわしい風貌をそなえており、他のどの作品よりも際立つて積極的に彼の自作であることを主張するがごとくに見える。

「離騷」・「九章」・「九辯」の親近性は、ただに内容において顯著な

ばかりではない。前述のごとく、各作品の間に共通する類似句が多いことは楚辭文學の目立つた表現上の特色であるが、そうした類似句は、後に詳しく紹介するように、この三作品の間においてこそ比類なく大量に用いられ、しかも互に偏することなくほぼ均衡のとれた緊密さで結ばれている。この點、同じく古い作品とはいいながら、「天問」・「招魂」がほとんど他の作品と共通する類似句を持たず、また「九歌」にしても、十句餘りの類似句を持つてはいるものの、その大部分は「離騷」と共通するもので占められ、「九章」と共通のものはわずかに一・二句、「九辯」とに至っては一句の關係すらもないといった偏向ぶりなると、この三作品は大いに趣きを異にする。もって「離騷」・「九章」・「九辯」が、類似句の面でもいかに同族的な關係にあるかを察することができるであろう。

私がこれからの論述の基盤を、いわば三部作ともいうべき「離騷」・「九章」・「九辯」に求めたのは、以上のような理由による。ではこの三作品は、具體的にどのような共通の類似句を持ち、またその類似句を媒介してどのような性質の相關關係を結んでいるのであろうか。以下に列擧する類似句は、すべて竹治貞夫氏の「楚辭索引」によつて機械的に抽出したものである――

A 「離騷」――「九章」

(離 騷)

(九 章)

- | | |
|------------|------------|
| 1 指九天以爲正兮 | 指蒼天以爲正(惜誦) |
| 2 非余心之所急 | 亦非余心之所志(兮) |
| 3 饨鬱邑余侘傺兮 | 心鬱邑余侘傺兮(兮) |
| 4 荃不察余之中情兮 | 又莫察余之中情(兮) |
| 5 曰眩暈直以亡身 | 行婞直而不豫兮 |

- | | |
|------------|--------------|
| 6 步余馬於蘭皋兮 | 鉉功用而不就(兮) |
| 7 自前世而固然 | 步余馬兮山臯(涉江) |
| 8 (曰黃昏以爲期兮 | 與前世而皆然兮(兮) |
| 羌中道而改路) | 昔君與我誠言兮 |
| 初既與余成言兮 | 曰黃昏以爲期 |
| 後悔遁而有他 | 羌中道而回畔兮 |
| 9 理弱而媒拙兮 | 反既有此他志(抽思) |
| 10 日忽忽其將暮 | 理弱而媒不通兮(兮) |
| 11 何不改此度 | 日昧昧其將暮(懷沙) |
| 12 聊假日以愉樂 | 未改此度(思美人) |
| 13 夕攬中州之宿莽 | 未改此度也(兮) |
| 14 佩繽紛其繁飾兮 | 聊假日以須時(兮) |
| 15 芳與澤其雜糅兮 | 牽長州之宿莽(兮) |
| 16 吾令蹇脩以爲理 | 佩繽紛以繚轉兮(兮) |
| 17 心猶豫而狐疑 | 芳與澤其雜糅兮(兮) |
| 18 芳與澤其雜糅兮 | 令薛荔以爲理兮(兮) |
| 19 謂幽蘭其不可佩 | 然容與而狐疑(兮) |
| 20 乘騏驎以馳騁兮 | 芳與澤其雜糅兮(惜往日) |
| 21 寧溘死以流亡兮 | 謂蕙若其不可佩(兮) |
| 22 曾歔歔余鬱邑兮 | 乘騏驎而馳騁兮(兮) |
| 23 折若木以拂日兮 | 寧溘死而流亡兮(兮) |
| 24 老冉冉其將至兮 | 曾歔歔之嗟嗟兮(悲回風) |
| | 折若木以蔽光兮(兮) |
| | 時亦冉冉而將至(兮) |

25 寧溘死以流亡兮 寧逝死而流亡兮(シ)
26 吾將從彭咸之所居 託彭咸之所居(シ)

B 「離騷」——「九辯」

(離騷)

1 及余飾之方壯兮 離芳諱之方壯兮(三)
2 又申之以攬芷 冬又申之以嚴霜(シ)
3 聊逍遙以相羊 聊逍遙以相伴(シ)

(九辯)

4 固時俗之工巧兮 何時俗之工巧兮
5 固規矩而改錯 背繩墨而改錯(五)
6 背繩墨以追曲兮

7 固時俗之工巧兮 何時俗之工巧兮
8 固規矩而改錯 減規槩而改鑿(シ)
9 非余心之所急 非余心之所樂(シ)

10 哀衆芳之蕪穢 長太息而增欷(七)
11 世幽昧以眩曜兮 恐田野之蕪穢(八)
12 戴雲旗之委蛇 世雷同而炫曜兮(シ)

13 戴雲旗之委蛇 戴雲旗之委蛇(九)

C 「九章」——「九辯」

(九章)

1 去故鄉而就遠兮(哀郢) 去家離鄉兮來遠客(二)
2 今逍遙而來東(シ) 超逍遙兮今焉薄(シ)
3 專惟君而無他(惜誦) 專思君兮不可化(シ)

(九辯)

4 中悶瞀之忼忼兮 中瞀亂兮迷惑(シ)
5 霰雪紛其無垠(涉江) 霰雪雰糅其增加兮(六)
6 歲忽忽其若頽兮 歲忽忽而適盡兮
7 時亦冉冉而將至(悲回風) 老冉冉而愈弛(七)

8 忠湛湛而願進兮(哀郢) 忠昭昭而願見兮(八)
9 彼堯舜之抗行兮 堯舜之抗行兮
10 瞭冥冥而薄天 瞭冥冥而薄天
11 衆讒人之嫉妬兮 何險巇之嫉妬兮
12 被以不慈之僞名(シ) 被以不慈之僞名(シ)

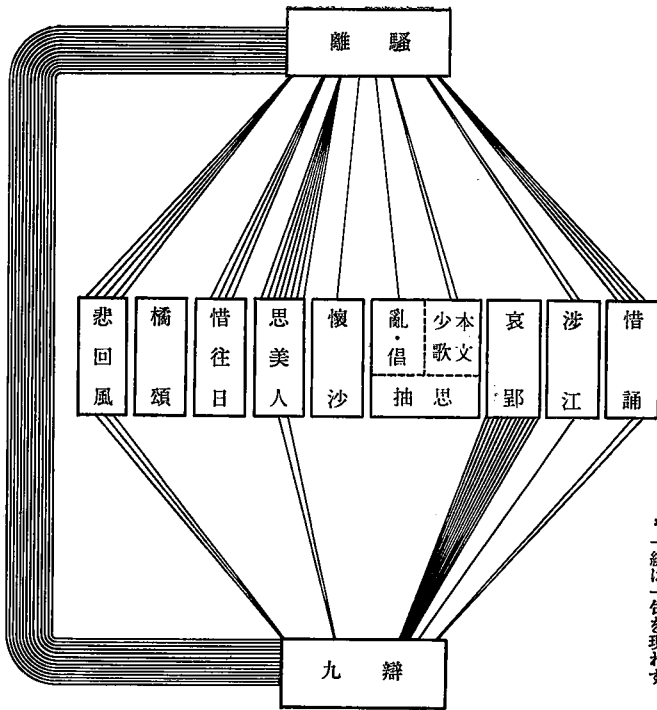
13 憎愠愠之脩美兮 憎愠愠之脩美兮
14 好夫人之愷慨 好夫人之愷慨
15 衆踳踳而日進兮 衆踳踳而日進兮
16 美超遠而逾邁(シ) 美超遠而逾邁(シ)

17 願寄言於浮雲兮 願寄言夫流星兮
18 羌儼忽而難當 羌儼忽而難當
19 羌宿高而難當(思美人)

20 任重石之何益(悲回風) 雖重介之何益(シ)
21 忽翱翔之焉薄(哀郢) 忽翱翔之焉薄(シ)
22 妬被離而郢之(シ) 妬被離而郢之(シ)

この表を通覧すれば直ちにわかるように、楚辭作品における類似句は、先行作品(具體的な作品の先後を言っているのではない)の一句ないし數句を大した造作も加えずにまるごと借用するのを原則とした、いわば大まかな摺み取りの模倣様式である。楚辭文學がこのようにあからさまな模倣様式を夥しく使用しているのは、明らかに意圖的であつ

て、朗誦文學としての演出効果をねらったためと思われる。すなわち、ある程度長い時間をかけて語ったと想像される朗誦文學にあっては、人々がすでに耳慣れた印象ぶかい先行作品の佳句を時々自分の作品に挟むことによつて、その朗誦に適宜氣分的なアクセントをつけることができたであろうし、また聴取者に快い感動と親近感を呼び起こ



*一線は一句を現わす

させる効果もたしかに期待できたであろう。私のこの見當がもし當っているならば、かかる楚辭の類似句は、先行作品がいくらかでも世間に流行してからでないとその表現効果を揚げ得ないことになる。だとすると、「離騷」・「九章」・「九辯」の長短十餘篇は、いずれが先いずれが後という具體的な制作順序の先後は一まずおき、かなりの期間をかけて次々と作りつがれていったもののように思われる。この豫測はやがて實證的な裏付けを得る機会に恵まれるはずであるから、今は取りあえず當面の類似句についてその總括的な考察を急ごう。

右に列擧した三作品間の類似句に本づき、作品相互の授受關係を圖示すれば上の圖表のごとくである――。

この圖表で、「九章」の中の「橘頌」だけは他の作品と關聯する類似句を全く持っていないが、これは、この作品が他篇と違つて四言という短く窮屈な詩形であるために、大まかに一句單位で授受することを中心とする楚辭の類似句方式に適應しにくかつた、という特殊事情によるものと判斷される。それで「橘頌」だけは一應別枠にして、その他の作品——詩形が概ね似かよい、従つて比較的容易に類似句の授受ができる好條件をそなえた十篇について、その授受關係を當つてみると、そこに極めてはっきりした二つの傾向があることに氣づく。すなわちその一つは、「離騷」を主體にして見るとき、この有名な作品と親密な授受關係を結んでいるのは、「惜誦」・「思美人」・「惜往日」・「悲回風」および「九辯」という、いずれも「亂」を持つていない作品であり、これに反して「亂」を持つ「涉江」・「哀郢」・「抽思」・「懷沙」の四篇はそうした「離騷」との關係が著しく稀薄であり、なかならず「哀郢」に至つては一句の關聯すら認められない、という現象である。他の一つの傾向は、「九辯」に視點をかえて見なおしたとき、

この作品は、今さきに指摘したように類似句上の相互關係が最も疎遠であつた「離騷」と「哀郢」——というよりも相互關係が全然なかつたこの二篇とだけ、奇妙にも際立って密接な授受關係を結んでいて、他の諸篇とはほとんど大した關係も交わしていない、という現象である。類似句の授受關係に見られるこうした二つの現象は、それがあまりにもはつきりと割り切つた現われ方をしていて偶然とはとても思へそうにないだけに、なにか容易ならぬ問題をはらんでいるような豫感が強くする。

四

類似句の授受關係からあぶり出されてきた如上の興味ある現象は、果して必然性を持ったものであろうか。それを解明するための一つの方法として、これら十篇の作品につき、その詩形を比較検討してみようと思う。

考察の便宜上「九辯」だけは後廻しにして、まず「離騷」・「九章」についていえば、このグループに所屬する諸篇が決して同列に扱いて得る作品でないことは、前節における類似句上の親疎關係からすで見當をつけ得たところであるが、それを最も端的に示す詩形上の特色は、前に少し觸れたことのある「亂」の有無である。すなわち、「離騷」と「涉江」・「哀郢」・「抽思」・「懷沙」の長短五篇にはそれぞれの末尾にいずれも「亂」が附いており、その他の「惜誦」・「思美人」・「惜往日」・「悲回風」四篇にはそれが無い。また、「離騷」・「涉江」以下の五篇と「惜誦」以下の四篇との相違は、ただに「亂」の有無において見られるだけでなく、その本文における押韻のしかたにも明瞭に現われている。すなわち、前者の本文にあつてはいずれも嚴格な四

句二韻の押韻をもつて終始されているが、これに對して後者のそれは、例えば「惜誦」における糧・芳・明（**lo*）、「思美人」における之・時・期（**o*）、「惜往日」における憂・求・游（**o*）、「悲回風」における紆・娛・居（**o*）のように、いずれも六句三韻の押韻を混入したルーズな形になっており、甚だしきは「惜往日」の時・疑・婣・治・之・否・欺・思・之・尤・之（**o*）、「悲回風」の傷・倡・忘・長・芳・章・芳・晧・羊・明（**o*）のように、一韻だけでズルズルと長く通している場合さえある。のみならず、こうした本文や亂における相違と符節を合するとく、「離騷」以下の五篇と「惜誦」以下の四篇とは、題名のつけ方までも全く趣向を異にしている。すなわち、前者はいずれもその内容から歸納的に割り出してつけた題名であるのに對して、後者はすべて篇首の二文字ないし三字を機械的に引きちぎってきただけの題名である。以上のように、篇題のつけ方・本文の押韻形式・亂の有無といった、いわば作品構成の第一次的な骨組み段階において、すでにこのような截然たる區別が認められる以上、「離騷」・「涉江」・「哀郢」・「抽思」・「懷沙」のグループと「惜誦」・「思美人」・「惜往日」・「悲回風」のグループとに大分けすることは、決して武斷な處置ではないであらう。だとすると、さきに保留しておいた「九辯」——六句三韻や多句一韻の押韻形式をしばしばまじえ、かつ「亂」も持っていないこの作品は、これと傾向を同じうする後者グループに一應組み入れておいてよいはずである。そして「九辯」をも含めた後者グループの特徴であるルーズな押韻様式や「亂」を缺く形式が、そのまま前漢の辭賦にもしばしば見られるところから推すと、これら後者グループの五篇は、その制作時期に多少の先後はあるにしても、漢賦にやがて直結しようとする頃から漢代にかけての比較

の新しい作品であつたように思われる。

これで「離騷」・「涉江」・「哀郢」・「抽思」・「懷沙」の五篇が割合に古い作品であることはほぼ見當がついたが、しかしこの五篇とても必ずしも作風を同じうするものではない。その違いは、本文よりも「亂」の詩形において特に顯著である。すなわち、まず句數は、「離騷」・「哀郢」の二篇がわずかに四一六句の短かさであるのに對して、「涉江」・「抽思」・「懷沙」の三篇は二二二〇句もの長きに達しており、従つてその關係から押韻も、前者が單純に一韻で用を足しているのに對して、後者は三―五回も換韻して目先の變化をはかつてゐる。また一句ごとの構造も、前者二篇がいづれもその本文と同じく五言以上の長短句から成つてゐるのに對して、後者三篇は原則として四言形式であり、この原則からはみ出た句はほんのわずかしかない。従つて——といふのは、楚辭の表現の一般通則がそうなのであるが——五言以上の不齊句から成る前者二篇では「兮」字が奇數句末にあり、四言を基調とする後者三篇では「橘頌」などと同じくこの字が偶數句末にある。同じく古い頃の作品とはいつても、「離騷」・「哀郢」の二篇と「涉江」・「抽思」・「懷沙」三篇との間に、すでに以上のようないくつかの明瞭な相違點があるとすれば、やはりこの二つのグループは明確に區別しておいた方がよいであらう。そして、こんなにまで様子の違う「亂」を持った二つのグループ——本文とてんで代り映えしない長短句を用いて、しかもほんの申し譯程度に短い「亂」を附け加えただけの「離騷」・「哀郢」と、これに反して本文とはガラリと變つた齊整な歌謠的リズムの四言句で、しかも換韻の妙をいくたびか味わわせつつ長々と「亂」を詠出する「涉江」・「抽思」・「懷沙」とは、いったいどちらが古拙な詩形でどちらが工夫をこらした新しい詩形か、もはやこ

れに對する解答は不要であらう。のみならず、「涉江」・「懷沙」の本文に見られる、詩形の變化を圖つた四言句の大幅な混入は、この二グループの制作順序の推定をさらに補強し支持するものである。

詩形を對象にした以上の考察を要約すれば、詮じつめた結論として、「離騷」・「哀郢」の二篇は他の諸篇に比べて最も相近似した詩形を持つ作品であり、しかも最もオリジナルな形態をとどめた古い作品でもあるらしいことが、だいたい明確になつてきた。そしてそのことと共に、最も古い「離騷」・「哀郢」二篇の出現について、やや詩形に新鮮味を加えた「涉江」・「抽思」・「懷沙」の三篇が作られ、さらに遅れて漢賦に近い性質の「惜誦」・「思美人」・「惜往日」・「悲回風」および「九辯」が作りつがれていった——という大まかな制作順序の推定をも、一應ながら合理的な考察過程を踏んで成立させ得たかと思う。

五

以上第三・四節において私は、類似句と詩形の兩方面から、「離騷」・「九章」・「九辯」における横の關係としての親疎關係と縦の關係としての制作順序とを主に考察してきた。私が、このように、楚辭文學の美しくも悲しい抒情の世界に殊更背を向けて、よくいえば客觀的な、悪くいえば人間性を喪失した残りかすのような表現形式ばかりを専ら對象としてきたのは、もちろんそれなりの意地っ張りな理由があつてのことである。といふのは、従來の楚辭研究は、極言すれば、作品から讀みとれる感じ——この作品には作者の悲壯な切迫感が漲つてゐるの、あの作品には氣分的な餘裕が感じられるの、といった主觀的ないし文人批評的な讀後感を、古來の傳承という前もつて用意されていたメーター原器に突き合わせて、各作品の制作時期や制作動機を思

い思いに推測していたのが、概ねの姿であったといえるが、私は、このような、いわば「詩經」篇々の作者をその内容からもっともらしく割り出した漢初の儒者たちの方法と本質的になんら變らない、齒がゆいばかりに陳腐な従來の研究方法に本能的な強い反撥を感じたからである。また、従來時たま、こうした曖昧で主觀的な楚辭認識に對して散發的に挑戦することがあつても、それは殘念にも積極的な客觀的證據を提示することができないばかりに、古來の傳承の前ににべもなく彈きかえされるのが常であつたからである。

私は、さきに作品間に見られる類似句の授受關係を検討した際に、それぞれの作品の成立順序がどう先後していたかは別にして、平面的な相關關係だけについていえば、「離騷」との關係は、「哀郢」には全くなく、「涉江」・「抽思」・「懷沙」三篇とも絶無ではないが稀薄であり、「惜誦」・「思美人」・「惜往日」・「悲回風」・「九辯」が最もこれと深い關係にあることを指摘しておいた。そして一方、詩形を考察した時に、その「離騷」と最も相似した詩形を持つのが「哀郢」であり、かつこの二篇が最も原初的な作品であつて、「涉江」・「抽思」・「懷沙」がこれにつづき、「惜誦」以下の五篇がさらにこれにつづいて作られたらしいことを指摘した。この類似句から見た傾向と詩形から推した制作順序とは、なんと憎らしいほど符合していることであろう。このあまりにも無抵抗で素直な符合現象を、私の仕組んだ芝居かと冷やかさないでほしい。古來の屈原傳説にこだわらないかぎり、おそらく誰が試みても同じ結果に落ち着くであろう。とにかく、類似句からと詩形からとの兩結果が、期せずしてこれほどまでの符合を示した以上、當面の十篇を時代順に「離騷」・「哀郢」の二篇、「涉江」・「抽思」・「懷沙」の三篇、「惜誦」以下の五篇、という三グループに大分けること

とは、おそらく不動の合理性を持つてであろう。かくてこの制作順序に従つたグループ分けが確認された時、これまたすでに指摘したところの、「九辯」が「離騷」と「哀郢」の二篇からだけ壓倒的に多數の表現を借用していた類似句現象が、はじめて必然性のあることとして理解できる。——「九辯」が作られた頃には、後世と様子がだいぶ違い、まだまだこの最も古い二つの作品は相拮抗して、世の詩人たちが特別に高く評價され、かつ人口にも膾炙されていたのに違いない。

かくて「離騷」・「哀郢」という最古の二作品に論點をしぼつて、そもその作られ方を考察すべき段階に至つた。ところで、この問題を解きほぐす上に大へん都合のよい二つの現象がある。これはすでに指摘を了えたところであるが、その一つは、「離騷」と「哀郢」との二篇だけが、他篇のばあいと異なり、全く類似句の授受關係を結んでいないことである。他の一つは、そのように表現の面で全く無關係であつたこの二篇が、楚辭作品の中で最も相似した詩形をそなえていることである。この一見矛盾する二つの現象を突き合わせてみると、「離騷」と「哀郢」とは、他の諸作品のばあいと成立事情が違つていて、具體的な表現の面では互に直接の交渉を持たないまま、従つてそれぞれ別個にちがう作者によつて、しかも兩篇に共通する詩形が流行していた期間内に、だいたい並行して作られ語られたのではないか。私のこの推定は、さらに次のような事實によつて補強し裏付けることができる

まず、「離騷」は疑う餘地なく全篇一人の作者の手になつた作品にちがいないが、その中には次にあげるような類似句が幾組も重複して用いられている。

1 苟余情其信嫵以練要兮——苟余情其信芳

- 2 忽反顧以遊目兮——忽反顧以流涕兮
 - 3 芳菲菲其彌章——芳菲菲而難虧兮
 - 4 孰云察余之中情——孰云察余之善惡一作中情
 - 5 日康娛而自忘兮——日康娛以淫遊
 - 6 朝發軔於蒼梧兮——朝發軔於天津兮
 - 夕余至於縣圃——夕余至於西極
 - 7 紛總總其離合兮——紛總總其離合兮
 - 8 世溷濁而不分兮——世溷濁而嫉賢兮
 - 好蔽美而嫉妒——好蔽美而稱惡
 - 9 折瓊枝以繼佩——折瓊枝以爲羞兮
 - 10 心猶豫而狐疑兮——心猶豫而狐疑
 - 11 惟此黨人其獨異——惟此黨人之不諒兮
 - 12 委厥美以從俗兮——委厥美而歷效
- 相當に長篇の作品とはいえ、同じ作者の同じ作品の中において、これほどまでに多く似通った表現を平氣でダブらせている以上、もし「離騷」と「哀郢」とが同じ作者のものであるならば、當然少しぐらいは兩篇にまたがる類似句が用いられていてもよさそうなはずなのに、そうした表現傾向は前述のごとく一向に見當らない。また「離騷」の作者がこのように一篇の中で同じような句を繰り返したがる嗜好を持つからは、もしこの二篇が同一人の作ならば、一方の「哀郢」にも當然そうした繰り返しの手法がいくらかは用いられていて然るべきなのに、その手法はこれまた一回も出てこない。このような現象は、「離騷」・「哀郢」が同じ作者によって作られたと見るよりも、もともと作風のちがう別人によって作られたと考える方に、より妥當性があることをはつきりと示すものである。

また、内容においても「離騷」と「哀郢」とは、その創作態度が全く對照的である。すなわち「哀郢」のそれは

- 1 民離散而相失兮——方仲春而東遷
- 2 去故鄉而就遠兮——邊江夏以流亡
- 3 出國門而軫懷兮——甲之嗚吾以行
- 4 發郢都而去閭兮——怊荒忽其焉極
- 5 過夏首而西浮兮——顧龍門而不見
- 6 將運舟而下浮兮——上洞庭而下江
- 7 去終古之所居兮——今逍遙而來東
- 8 背夏浦而西思兮——哀故鄉之日遠
- 9 當陵陽之焉至兮——淼南渡之焉如
- 10 惟郢都之遠遠兮——江與夏之不可涉
- 11 忽若去而不信兮——至今九年而不復

といったふうに、楚辭のいかなる作品よりも際立って克明に、ヒーローの具體的な足取りや時間を捕捉し詠みこむことに意を注いでいる。その意味で「離騷」は、いわばノンフィクションの短篇作品である。これに對して「離騷」は、周知のようにかかる具體的要素をほとんど含まないで、ヒーローの夢幻的な天地遊行にこそ創作の力點をおいた、いわばフィクションの長篇作品といつてよい。「離騷」と「哀郢」との間に見られるこうした截然たる創作態度の對立は、作者の恣意的な心境の變化や隨時的な目的の違ひによるのではなく、おそらくはもっと根本的に、作者自身の世界觀やヒーローに對する認識程度と深く關聯するであろう。だとすれば、これによつてもまた兩篇の作者が別人であつたことを認めないわけにはいかなないのである。

美しく正しい心を持ちながら讒言のために退けられた屈原を共にヒ

ローとしながらも、四方を遊行する過程と心情とを夢幻的に詠ずる「離騷」と、江南に流浪して郢都をはるかに懐しむ彼を現實的に詠ずる「哀郢」とが、すでに別々の作者によつて作られた作品であつたとすれば、最後に残る問題は、せめてこの兩篇のうちどちらか一方だけでも屈原の自作と見ることはできないものか、といういじらしい期待への應對である。だが私は残念ながらこの期待をも退けねばならない。なぜならば、これをかなえることはまず理論的に困難だからである。すなわち、「離騷」にせよ「哀郢」にせよ、そのどちらか一方が當のヒーローである屈原その人の自作であつたならば、他の一方の作品は多少ともそれに後れ、それに觸發されて作られた作品と考えるのが自然であつて、屈原がみずからの心情や行動を文學作品として吐露する前に、すでに彼を悲しむ他人の作品が存在したとは到底考えられないことである。そうした場合、後の方の作品は、楚辭という朗誦文學の常として、當然その有名な屈原の自作からせめていくばくなりとも表現を借用してことに、みずからの作品の演出的効果をあげるべく圖つたであらうに、そうした傾向が全然見當らないこと前述のごとくである。これは明らかに矛盾するといわねばならない。

「離騷」・「哀郢」が共に屈原の自作でないことは、ただに抽象的な理窟からいえるだけではなく、内容や表現の面からも具體的にそれを證明することさえできる。まず「離騷」についていえば、その夢幻的な虚構の詩風は、「涉江」・「抽思」・「懷沙」三篇が作られた比較的初期の頃には、まだ詩人たちの興味を全く引いておらなかつたらしく、三篇いずれも非虚構の作品ばかりであつて、その虚構の詩風が本格的に模倣されるのはようやく「惜誦」・「思美人」・「悲回風」になつてからである。またこれとほとんど符合する現象として、すでに述べた類

似句の授受關係からおよその推測がついていゝのであろうように、「離騷」は、「涉江」・「抽思」・「懷沙」三篇の作者たちに對しては、まださほど大きな表現上の魅力を感じさせてはいなかつたらしいのに、それが降つて「惜誦」・「思美人」・「惜往日」・「悲回風」・「九辯」の作られる頃となると、尻上がりに頻繁にその表現を利用されるようになっていゝ。こうした二つの相似た現象は、「離騷」という夢幻的な虚構の作品が漸次人々の興味を呼び世間に流行していく時代の推移を寫し出しているとともに、この作品が決して屈原自身の作品でなかつたことを物語る。というのは、もし屈原の自作であつたならば、もっと最初から詩人たちの強い關心をひいたであらうから——。その點、一方の「哀郢」が、いち早く「涉江」・「抽思」・「懷沙」という續篇によつて力強くその非虚構文學としての詩風を繼承されたのと對照的である。

だが、この「哀郢」とても屈原の自作と認めるには聊か躊躇せざるを得ない問題點を含んでいゝ。というのは、つぎのような言葉があるからである——

彼堯舜之抗行兮 瞭查杳其薄天
衆讒人之嫉妬兮 被以不慈之僞名

これは堯舜に對する有らぬ評價に強く反撥したクダリであるが、堯舜を不慈とする反儒教的評價は、現在知り得るかぎりでは、「呂氏春秋」仲冬紀當務篇の「堯有不慈之名、舜有不孝之行」に始まり、漢初の追加部分といわれる「莊子」雜篇盜跖篇の「堯不慈、舜不孝」に承けつがれる思想であつて、それ以前には全く現われて來なかつた口吻である。まことに、このような堯舜に對する露骨でどぎつい挑撥的な反儒教的思想は、時代的にも地域的にも屈原や荀子の側のものではなく、

せいぜい戦國時代もごく終末期から始まり、秦漢に入つて活潑に行なわれた思想のように推定される。だとすれば、こうした葬葬への悪意にみちた評價を強く意識し、これを眞正面から取り上げた「哀郢」の制作時期は、やはり屈原よりもっと後れる頃と見るのが妥當であるう。

これを要するに、理論的にも實證的にも、「離騷」・「哀郢」を積極的に屈原の自作と認め得るだけの材料は全く出て来ないで、それに逆行するものばかりが次々と浮かびあがる。おそらくこの二篇は、屈原の死後、彼への記憶が世上にまだ生々しく残っていた頃の詩人が、非運の忠臣を悼み慕う世人からの共感ないし喝采を當てこんで、一つはその事蹟の忠實な文學的再現を企圖し、他の一つはその心情のドラマチックな具象化を試みた作品であろう。そしてこの「離騷」と「哀郢」の兩篇によつて創始された虚構・非虚構の詩體が、やがて以後につづく多くの屈原系作品の性格を二つに仕分けることにもなるのである。

* * * * *

なお、最も古い作品と推定される「離騷」・「哀郢」の作られ方が以上に述べたごとくであるならば、ここから切り崩していくことによつて、少なくとも「九章」の各篇や「九辯」が作りつがれていく推移に、一つの法則を見つけ出すことができるかと豫想され、またそれらが漢代の作品に連絡していく系譜も、ある程度新しく合理的に考えなおし得る可能性が出てくるはずである。これらの點については他日あらためて論じてみようと思う。

(一九六六・三・三〇)

註(1) 鈴木虎雄「騷賦の生成を論ず」の第三章第四節「楚の修辭家」(支那文學研究「三七八—三八三頁」)参照。

(2) 司馬遷が、この四篇全部を「離騷」と同様に屈原の自作と思ひこんで

いたかどうかは、これだけの文からは断定しにくい。しかし、少なくとも屈原の心境を忠實に寫した比較的古い作品と認めていたことは確實である。

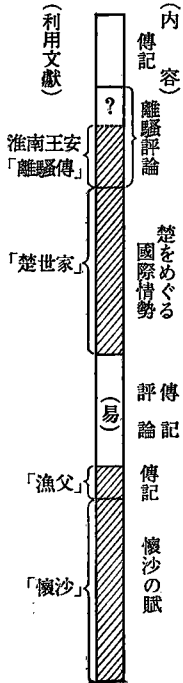
(3) 青木正兒「新譯楚辭」序説における史記屈原傳と新序節士篇との比較(一四—二頁)を参照。なおこの序説は「中國古典詩集★」(筑摩書房「世界文學大系」所收)の三七八—三八六頁にも「解説」としてそのまま再録されている。

(4) 廖・胡兩氏の説とそれに對する諸家の反駁は、星川清孝「楚辭の研究」(二六九—二七六頁)に詳しく紹介されている。

(5) この楚世家と屈原傳の異同について、「史記索隱」は昭雅・屈原の二人が共に諫めた言葉と推測しているが、これはいかにも便宜主義的な見解である。また最近、林庚「史記屈原列傳簡注」(「詩人屈原及其作品研究」所收)は、世家に從つて屈原傳の「屈平曰」を「昭雅曰」と改めているが、たとい事實はそうであっても、ここは屈原傳の文章であること無視した武斷な見解である。

(6) 瀧川龜太郎「史記會注考證」卷八四の四頁を参照。なお淮南王安の「離騷傳」について、清の王念孫「讀書雜誌」卷四は「離騷傳(賦)」の誤寫説を立てている。今かりに班固「離騷序」(「楚辭王注引」)の所引に從つておく。

(7) 以上に述べた「史記」屈原傳の内容とその利用文獻との關係を圖示すれば左のごとくである。



(8) 前述の屈原不存在説のような極端な説が出て来たのも、かかる屈原傳の記事の曖昧さに原因する。

(9) このほか楚辭文學の表現上の特色として「紛纒繼」・「杳冥冥」のような三シラブルの形状語が多く用いられているが、これは單なる文學用語として見た方が妥當なので、たとい二篇以上に共通して同じ形状語が出て來ても、類似句としては取らないことにする。

(10) 「天問」・「招魂」における他作品と共通する類似句は、次にあげるものだけである。

(天問) 1 九辯九歌 (離騷) 啓九辯與九歌兮

2 而顛隕厥首・何顛易厥首 (離騷) 厥首用夫顛隕

3 玄鳥致貽 (九章・思美人) 遭玄鳥而致貽

(招魂) 1 雄虺九首 (天問) 雄虺九首

2 汨吾南土 (九章・懷沙) 汨徂南土

(11) 「九歌」がほとんど「離騷」とだけしか表現上の關聯を持っていないことと、その詩形が戰國の吳楚の歌謠に比べて著しく齊整であることを考え合わせると、この作品群は「離騷」が壓倒的な流行を見せるようになった以後の作であることが推定される。(第五節を参照)

(12) 一本にはこの二句がない。「抽思」から紛れこんだ衍文と見るのが妥當である。その理由の詳細は洪興祖「楚辭補注」・聞一多「楚辭校補」などに見える。

(13) 聞一多「楚辭校補」は、「涉江」の冒頭部分を「惜誦」篇末からの竄入とし、かつその一部を「惜誦」の「亂」の文章と推定している。たしかに「惜誦」・「涉江」の該所は文章が亂れているが、かといって聞氏の説にも従いかねる。あまりにもその假説に無理がありすぎるからである。「惜誦」篇末と「涉江」の冒頭部分には、もっと次元のちがう複雑な錯亂事情があったのであろうと思う。

(14) 「涉江」・「哀郢」・「抽思」・「懷沙」が、ヒーローの具體的な經歷や位

置を明示していることも、この推定の有力な裏付けとなる。詳細は、竹治貞夫「楚辭九章に就いて」(徳島大學學藝紀要) 人文科學第六卷別冊二一―二二頁)を参照。

(15) 以上の例文は、すべて竹治氏の前掲論文(註14)から借用した。

(16) 姜亮夫「屈原賦校注」(四三二頁)は、この數句を「九辯」からの竄入と見ているが、これは誤りである。その理由については星川清孝「楚辭の研究」(六四五頁)が明快な説明をしているので参照してほしい。

(附記) この論文は、東北大學の金谷治教授を代表者とする昭和三九・四〇年度文部省科學研究費による綜合研究「先秦道家思想の系譜」のうち、私の分擔する「道家思想と辭賦」の研究の一部である。